

十人十色

流山市立おおぐろの森中学校 三年 石川 理一郎

目に見えるその先の色が人それぞれ違うということ。それが、どういうことなのか、僕は説明できる。

「白って二百色あんねん。」

まさにその通りだ。僕には、白が何千色かに分かれて見えるんだ。白固定じゃないけれど。

生まれつきではないが、幼稚園の頃、そのことが発覚した。「色覚異常」またの名を「先天色覚異常」という病気を病院で耳にした。先天色覚異常とは、主に青と赤、黄と緑など、二つの色を対等に見ることができない病気である。僕には青いチョークが赤に見え、黄色いチョークが黄緑に見える。実際黒板を見ると、かなり不便である。あの壁に飾ってある真っ白なプリントが何色にも混じって見える。

事が皆に知れわたったのは小学四年生のときだ。僕が隣の人に「先生の用いているあのチョークは何色。」と聞いたところ、彼女は驚き、その色を言うどころか周りに僕のことを教え始め、はやし立てた。

「このペン何色。」「このノートに何の色の文字が書かれてる。笑」

僕はたまらなく口惜しかった。口で何も言うこともできず、やがて色が嫌いになった。その後、気にされることもなく、中三になった。僕の学校では電子黒板を用いて授業をするようになった。機械だから、赤と青の違いもよく分かるようになった。でも、あのはやし立てたあいつらの一人一人の顔の色を判別するように色はまだ判別しなければならなかった。

色を通じてこんな酷い思いをしなければならなかったのか。きっとそいつらからは僕の顔も、持っているペンも、正しい色で見ることができているのだろう。うらやましいが、うっとうしくもある。

どうやら僕の持っている病気は、男性では二十人に一人、女性では五百人に一人に値する。ということは、僕はクラスの中で唯一この症状を持っていると

いうことだ。

実際その割合に値する（僕と同類）人間はいるが、まだ会ったことも会話しなかったこともない。でもきっと、僕と同じく拒まれ、省かれ、はやし立てられ、やがて気にされず、そして病気でこんなつらく、淡く、虚しく、自分をどんどん追いこんでいき、やがてただ一人死んでしまうこともある。これは、いじめによって亡くなる方の証言だろう。思考だろう。

僕はそうやって自分とは違うということを盾にして人をはやし立てる人々に、こう思う。

「じゃあ、君もこの病気になってみる。思いっきりはやし立ててやるから。」でも、届くわけない。だから、いじめは酷く恐ろしくて史上最恐の人を殺すのだと僕は思う。いじめをする側は、大半は何も考えずただその場を離れる。誰も止めることも、助けることもできない。いじめは、だからなくなるならない。

願ったって、叶わず、泣いたって叶わず、怒ったって叶わず、妬んだって叶わない。

病気に苦しんでいる人を、敵や異常者なんて言わないでほしい。なりたくてなったんじゃないから。そして、その人を見捨てないでほしい。庇ったら、きっと君はヒーローになれるんだから。その人にも、自分にも。

いじめに対する在り方を考え直したい。僕のような思いをつらく受け止めている人を一人でも救いたい。そして、障害や病気になっている人の心の内を聞きこんで分かってあげたい。

そして、すべての人が、少しでもいじめの在り方や過去の自分の行いを、考え、直せるようになってほしい。まだ、いろんな人を救えると思う。

僕は、目に見える色が人それぞれ違うことも分かる。だから、僕は十人十色みたいと捉える。これを僕ははっきりと主張したい。色なんて、多種多様で、たくさんあるんだから。「だから、色は十人十色でいいんだよ。」